

## 台湾探訪と二・二八事件・白色テロ

——台湾現代史の負の遺構を訪れる——

京 俊 介

### 一 はじめに

本稿は、台湾における二・二八事件および白色テロ（白色恐怖）に関する施設・遺構を紹介することと、それへの外国人観光客のアクセス可能性について検討することを目的とする。台湾を観光目的で訪れる外国人は、その豊かな食文化を楽しむことや華やかな観光地を訪れることを主たる目的としている。もちろん、それは台湾を訪問する際の大きな魅力ではあるが、歴史を知り、教養を深めるといった視点に基づく観光の仕方もあるだろう。

この視点に照らし、本稿は、中京大学と国立政治大学・国立台湾歴史博物館との交流事業を通じて筆者が訪問した、二・二八事件・白色テロに関係する施設を紹介する。その際、多くの日本人観光客が台湾を訪れる際に手にするであろう観光ガイドブックと、英語圏の旅行者にとって最も一般的な観光ガイドブックの記述について検討する。

この作業を通じて、それらの施設が台湾人にとって自国の歴史を知るといふ意味で重要であるだけでなく、国際的にも価値があることを確認するとともに、台湾の新たな観光資源としての位置付けという視点から、外国人観光客がそれらの施設を訪れやすい環境が整っているかを検討する。

## 二 本稿の問題意識

台北駐日経済文化代表処（事実上の駐日大使館に相当する）の委託を受けて行われた、日本人を対象とした台湾についての意識調査によれば、日本人が「台湾」と聞いて思いつくこと（複数回答可）の上位四項目は、上位から順に、「日本に友好的（七一・九%）」、「食べ物がおいしい（四五・九%）」、「日本と歴史的なつながりがある（三九・〇%）」、「観光地が豊富（三五・八%）」である。<sup>1)</sup>日本の書店に並べられている台湾の観光ガイドブックをいくつか眺めてみても、食に関するもの、日本統治時代の建築物ほか日本とのつながり、そして（観光ガイドブックなので当然ではあるが）観光地に関する記載が目立っており、この調査における日本人の台湾イメージと一致する。

他方、七位には「自由・民主主義の国（二〇・六%）」があげられている。台湾と聞いて「日本と歴史的なつながりがある」ことを思いつく日本人が約四割いることから示されるように、日本人の多くは終戦時までは台湾が日本の植民地であったことを知っており、そして約二割が「台湾」と聞いて、現在は自由民主主義体制の国であることを思いつく。しかしながら、終戦時から現在までの台湾の姿がどのようなものであったのかを、台湾に多数訪れている日本人観光客が理解しているかといえは、筆者自身が学生時代に台湾を初めて訪れたときのことを思い出してみても、さらには台湾に強い関心を抱くきっかけとなった本交流事業における初回の訪台時のことを思い出し

てみても、甚だ心許ない（もちろん単に筆者のみが無知であったという可能性は完全には否定できないのであるが）。以上の問題意識に基づきながら、本報告は、中京大学と、国立政治大学および国立台湾歴史博物館との交流事業を通じて、筆者が二〇一六年二月―二〇一八年三月の間に四度訪台する機会を得て訪問した二・二八事件と白色テロに関する展示のある施設や遺構を紹介する。その際、単に紹介するだけではなく、そういった施設に関心をもつものの事前に詳細な調査を行うわけではない一般的な外国人観光客がその施設や遺構を訪れることができるか、そのアクセス可能性を、観光ガイドブックの内容を検討することを通じて明らかにする。

### 三 二・二八事件・白色テロに関する観光ガイドブックの記述

次節では、筆者が訪問した二・二八事件・白色テロに関する五つの施設・遺構を紹介するが、それに先立ち、そもそも台湾を訪れる外国人観光客が二・二八事件等のことを知りうるのかについて、一般的な観光ガイドブックの内容から検討してみよう。

以下、調査対象とするガイドブックは、現在の日本人が海外旅行をする際に参照するガイドブックとして最も「定番」であると言える、『地球の歩き方』（ダイヤモンド・ビッグ社）の「台湾」各年版<sup>2</sup>、名古屋市内の大型書店の海外ガイドブックのコーナーに陳列されているシリーズ物（台湾だけでなく他の国の版があるもの）のガイドブックの台湾および台北版（本稿末にリストを記載。台湾版一〇冊、台北版二冊の計二冊<sup>3</sup>）、および、英語圏で最も一般的な観光ガイドブックとされる、Lonely Planet (Lonely Planet Publications) の台湾版（主として二〇〇一年以降の版<sup>4</sup>）である。

『地球の歩き方』は、一九九一年版から毎年版に「台湾小史」（一九九七年版で大幅に改訂、二〇〇四年版からは「台湾の歴史」と改称）として二・二八事件を含む台湾の通史を掲載している（執筆者は澁谷司・拓殖大学教授）。二・二八事件については、以下のように記されている。<sup>5)</sup>

事件は、一九四七年二月二七日の夜、台北市で国民党の専売局ヤミタバコ摘発隊が、逃げ遅れた寡婦を殴つたことに始まる。それに抗議して集まった台湾人に向かって発砲し、ひとり殺してしまった。翌二八日、台湾人のデモ隊が専売局に押しかけ、さらに、行政長官公署に向かったのだが、そのとき、機関銃の一斉掃射を受け、多数の死傷者を出したのである。そこで憤慨した台湾人らは、「光復」後の台湾に移住してきた外省人の店舗を焼き討ちにした。また、台北市放送局を占拠し、全島民が呼応して決起するよう呼びかけた。

この国民党に対する台湾人の「反乱」は、結局、蒋介石の指示によって武力鎮圧され、「台湾人」エリート層のかんりの人数（数千人といわれている）が闇へ葬り去られた。ここに、本省人（＝「台湾人」と外省人（＝「中国人」との角逐が始まったのである。この二・二八事件によって再び中国に対する幻滅を経験した「台湾人」は、中国大陆との精神的依存状態から、ほぼ脱却したと考えられる。

Lonely Planet においては、二・二八事件については二〇〇一年版の「台湾に関する事実 歴史」の中では簡単に触れられるのみであったが、中西部の都市・嘉義の紹介ページの中には見開きの三分の二ほどを占めるコラムが用意されている（三三三丁三三三頁）。事の起りについての記述は上に引用した『地球の歩き方』の記述と大差ないが、事件のニュースが全島に広まった後の記述について重要と思われる箇所を引用しておく（以下、Lonely

Planet の日本語訳は全て筆者による)。

陳儀は狼狽した。続く一〇日間は抗議者との交渉に応じるふりをする一方で、(中国大陸の南京にいた) 蒋介石に援軍を送るよう打電していた。自由な報道は封じられた。一九四七年三月一〇日、戒嚴令が布告された。それはその後四〇年間有効なまま維持された。

大陸の軍隊が台湾に到着したとき、彼らは政府の統治に対するありうる抵抗を全て速やかに打破せよという命令を受けていた。正確な死者の数は分からないが、一万八〇〇〇人から二万八〇〇〇人の間であると推測されている。殺害は数週間を超えて行われた。抗議者として知られた人々が特に狙われたが、すぐにジャーナリスト、法律家、医者、教員、学生といった、他の潜在的な「厄介者 (troublemakers)」へと拡大していった。

さらに、New York Times や Newsweek で事件が報じられたものの世界が関心を払わなかったことや、駐台アメリカ領事を通じて助けが求められたもののアメリカ政府が見て見ぬふりをしたことなどが記されている。

次の二〇〇四年版では、二・二八事件は「歴史」の中のコラムとして、「国民党統治下の台湾」のページに記されている(二五頁)。割かれているスペースは二〇〇一年版の半分以下の半頁ほどになったが、それでも比較的詳細に記されていると言えよう。また、この版では「台湾の白色テロ」と題するコラムが緑島のページに新たに設けられている(一八八頁)。

台湾の歴史で最も暗い時代の一つは、白色テロの時期であった。一九五〇年代に政府は島中の政治活動家を

肅正する大規模な運動を開始した。政府の政策に抗議した多くの人は拘留され、国家転覆の罪を着せられ、死刑または終身刑に処された。拘留された人の中にはたしかに政治的スパイもいたが、多くは不当に告発された人たちであつたといわれる。九万人を超える人々が拘留され、少なくともその半数が処刑された。台湾人だけが対象ではなく、かなりの数の大陸系中国人も拘留または殺害された。

二〇〇七年版では、二・二八事件と白色テロのコラムはともに「蒋政権期の台湾」におかれ、続く二〇一一年版でもその方針は引き継がれている。二〇一四年版では、白色テロのコラムが削除されたが、代わりに「軍の狂気」と題するコラムがおかれた(三三三頁)。ここには最近の政府の研究に依拠し、戒厳令下において「一四万人を超える人々が拘留され(多くは拷問されて緑島の収容所へ送られた)、三〇〇〇〜四〇〇〇人が処刑された」と記されている。

続く二〇一七年版での大きな変化は、二・二八事件について詳細に記述するコラムがなくなったことである。二・二八事件については、二二八和平公園や台北二二八纪念馆の紹介ページ(五九頁)、そして「歴史」のページの下部に掲載された「年表」における「閩市のタバコ売りと専売局の役人の衝突が国民党統治に対する全島規模の反乱へとつながる。これが二・二八事件として知られる」という記述(三三〇頁)、および、歴史の記述本文中に「一九四七年に政府に対する反乱が生じ、数万人の市民の死につながった」という記述(三三三頁)のみになった。ただし、白色テロのコラムは復活し(三三九頁)、「軍の狂気」のコラムも維持されている(三三七頁)。そのため、二・二八事件について知ることができなくなったわけではないが、「軍の狂気」のコラムはオランダ植民地時代のページに配置され、白色テロのコラムは清朝時代と日本の植民地時代のページに配置されるといって、読みにくい編

集になってしまっている。

このように、『地球の歩き方』では二・二八事件についてその背景や帰結を一通り把握できるようにしており、『Lonely Planet』では二・二八事件が国際的な反応も含めてより詳細に記述されている。では、『地球の歩き方』以外の一般的な日本人観光客が手に取るであろう観光ガイドブックではどうか。調査対象とした三冊のうち、『タビトモ 台湾——高雄・台南・花蓮・台北』（JTBパブリッシング、二〇一八年）、『ことりっぷ 海外版 台北』（昭文社、二〇一四年）、および、『まっぷる 台湾 一九』（昭文社、二〇一八年）の三冊に記述があるものの、それ以外の一九冊には記述がなかった。台湾を訪れる日本人観光客におけるガイドブックのシェアは不明であるが、掲載冊数からみる限り、多くの日本人観光客は、少なくとも台湾を初めて訪れた時点では、『地球の歩き方』の『台湾の歴史』等を読んでいない限り、二・二八事件についてよく知り得ない状況におかれていると言えるだろう。なお、掲載があつた三冊の記述は以下の通りである。

一九四七年二月二八日に台北で発生した本省人と外省人との抗争。一九九二年の刑法改正までの間に、約二万八〇〇〇人も本省人が殺害・処刑されたといわれる。（『タビトモ 台湾——高雄・台南・花蓮・台北』、九頁）

二二八事件は終戦後、中華民国政府の横暴に対し、民衆が蜂起した事件。（『ことりっぷ 海外版 台北』、七五頁）

一九四七年二月二八日に台北市で発生し、多くの死者を出した弾圧事件。日本国籍を有していた本省人（台湾人）と外省人（在台中国人）との大規模な抗争で、この事件をきっかけに三八年もの間、戒嚴令が敷かれることとなった。（『まっふる 台湾 一九、七〇頁』）

いずれも短い記述であり、残念ながら二・二八事件とその後の白色テロの重大性や残虐性を十分に捉えたものとは言いがたい。

こうした状況を踏まえながら、以下では、二・二八事件に関する予備知識がなくても、外国人観光客が比較的容易にたどり着くことのできる、台北二二八紀念館から順に紹介する。

#### 四 二・二八事件・白色テロに関する施設・遺構の紹介

##### 四、一 台北二二八紀念館（台北市）

台北二二八紀念館は、二・二八事件と白色テロを包括的に知ることのできる資料館である。二二八和平公園内にあり、同公園内には二・二八事件の記念碑もある。

二二八和平公園は、一九九六年に改称されて現在の名になっている。改称直後に出版された『地球の歩き方 台湾』（一九九七 九八年版）には早くもガイド項目が登場し（それ以前は地図上に「台北新公園」としてのみ掲載）、一九九九 二〇〇〇年版からしばらくは（一時を除いて）記念碑の写真が掲載されており、二〇〇二 〇三年版からは紀念館の記述が追加され（紀念館の写真は二〇一四 一五年版から掲載）、現在に至っている。二二八和平公

図一 台北の地図



(出典：Googleマップに筆者追記)

園は、二二冊のガイドブックのうち一冊にガイド項目が掲載されている主要な観光地である。ただし、台北二二八記念館については、たった三冊にしか記載されていない。とはいえ、二二八和平公園を訪れる観光客は多いと考えられるので、その目に留まる機会も十分にあるだろう。なお、Lonely Planet においては、二〇〇一年版から二二八和平公園のガイド項目内に台北二二八記念館が記載され、二〇〇七年版からは独立したガイド項目として掲載されている。各地への交通の起点である台北駅や観光名所である總統府からも徒歩圏内であるため（図一）、外国人観光客にとっては通常の観光の合間であつても訪れやすい立地にある。

入場料は二〇元（約八〇円）と安く、無料で日本語案内資料も参照できる。Lonely Planet によれば、英語のできるボランティアスタッフが一緒に歩きながら案内してくれると紹介されており（二〇〇四、二〇〇七、二〇一一年版）、各国語版のオーディオガイドも利用できると記されている（二〇〇七、二〇一一年版）。なお、筆者が二〇一七年二月二十八日（二・二八事件七〇周年の式典が開催された日）に訪れた際には、薛化元教授（国立政治大学）が理事長を務める財団法人二二八事件紀念基金会のご配慮により、日本語のできる方による案内を受けることができた。また、売店では展示の詳細を日本語で解説した

写真一 台北二二八紀念館



(撮影：檜山幸夫氏)

『台北二二八紀念館の常設展示特集』（一〇〇元）も入手可能である。

上述した通り、日本の一般的なガイドブックにおいて、当施設はガイド項目としてはたった三冊にしか掲載されていないが、半数が掲載している二二八和平記念公園にあるので、台北観光の際にここを訪れる日本人は少なくないと思われる。筆者自身も、まだ二・二八事件について何も知らない大学生のときに偶然訪れている。しかし、残念ながら休館日であり、施設前に設置されている展示を見たのみで、後は同行した友人たちと近くの「健康歩道」（足ツボを刺激する石が敷き詰められた道）に挑戦した記憶と写真が残っている。なお、本施設の建物は、日本統治時代には台湾放送協会として使用されていたものである（写真一）。

#### 四、二二二八国家記念館（台北市）

二二八国家記念館も、二・二八事件と白色テロを包括的に知ることのできる資料館であるという点では台北二二八紀念館と同様である。ただし、受難者の名誉回復運動のための施

写真二 二二八国家記念館



（撮影：檜山幸夫氏）

設という性質をもつためか、二・二八事件・白色テロの被害者（受難者）の横顔の紹介が多いのが特徴である。知的エリートであった被害者たちの中には、日本（当時は内地）の大学の卒業者も多く、同じ大学の後輩にあたる日本人にとっては身近に感じることができるともいえない<sup>6</sup>。この施設では時折、薛化元教授監修の特別展も開催されているようである。

台北二二八記念館とは異なり、調査対象としたどのガイドブックにおいても、この施設を紹介する項目は発見できなかった。しかしながら、当施設は入場無料で、観光客が多く訪れる中正記念堂からも近い（図一）、ついでに訪れることは十分ありうる選択肢である。中正記念堂は蒋介石を称える施設であるため、それとセットで訪れることは、戒厳令下における蒋介石や国民党政府の表の顔と裏の顔の両方を知ることができるといって、魅力的な観光ルートになりうるのではないだろうか。なおこの施設も、日本統治時代の建物（台湾教育会館）が使用されている（写真二）。



(撮影：筆者)

#### 四、三 国立台湾歴史博物館（台南市）

国立台湾歴史博物館（写真三）は、台湾の歴史全般についての展示が行われている博物館であり、二・二八事件に特化されたものではない。しかしながら、国立の研究機関として強い調査研究機能を持ち、二・二八事件に関する資料調査を継続的に行っており（二〇一八年三月の訪問時には収蔵されている二・二八事件の資料を特別に閲覧させていただいた）、その成果を定期的に二・二八事件の特別展として公開しているため、その期間に合わせて訪問すると毎回異なる展示に出会える可能性がある。

観光客にとつてのこの施設の難点は、台南市の郊外に所在するため、交通アクセスがよくないことである。この施設についても、調査対象としたガイドブックにはガイド項目を発見することはできなかった。台南については台南駅から近い旧市街地に観光地が集中しており、ガイドブックもそれを紹介する傾向がみられる。しかし、台湾の歴史全般を知ることのできる施設であるため、台湾を深く知りたい観光客にとつては、台南観光の際に半日ほどかけても訪れる価値はある。

写真四 景美人権文化園区



（撮影：檜山幸夫氏）

以上は二・二八事件と白色テロを「知る」ことのできる資料館であった。以下では、二・二八事件を「感じる」ことのできる遺構を紹介する。

#### 四、四 景美人権文化園区（新北市）

景美人権文化園区は、白色テロの時代に拘留所として使用された施設である（写真四）。「政治犯」として捕縛された人々がどのように扱われたか、実際に使用された施設に入って見学することで「感じる」ことができる。もちろん、二・二八事件と白色テロを「知る」ことのできる資料の展示もある。資料の展示のうち、「感じる」という点での見どころの一つは、「政治犯」として捕縛された人々が裁かれた異常な法廷を復元した展示である（写真五）。実際に裁判を受けた郭振純氏の手記によれば、公設弁護士は被告に不利な事柄を洗いざらい吐き出させるのが本務であり、そもそも裁判官・検察官・弁護士の三者は、ある裁判が終われば次の裁判では衣装と役割を入れ替えており、裁判という体裁を整えるだけの存在に過ぎなかった。

写真五 軍事法廷（復元）



(撮影：小坂田裕子氏)

調査対象としたガイドブックには、当施設の記載は確認できなかった。景美という地域が取り上げられていることもあるが、有名な夜市の紹介しかない。ただし、台湾在住の日本人が台湾を紹介している個人ブログや新聞記者による旅行記には詳細な紹介が掲載されている<sup>8)</sup>。台北近郊に所在しているが(図一)、地下鉄駅から徒歩一五分程度かかる距離にある。近隣には上述した夜市以外目立った観光地はないが、同じ路線を終点まで行けば烏来などの人気観光地に至るので、その道中に立ち寄ることは可能であろう。当施設に設置されていたゲストブックを見たところ、研修目的の日本人の団体はよくこの施設を訪れているようである。

二〇一七年八月の訪問時には、白色テロの被害者である郭振純氏が施設や展示の案内をして下さった(写真六)<sup>9)</sup>。一九二五年生まれの郭氏は、一九五三年に連続非合法集会参加容疑で逮捕・投獄・無期徒刑(無期懲役)の判決を受け、一九七五年まで各地で収監された。郭氏の受難経験は日本の雑誌にインタビューと手記が掲載されており、日本語で読むことができる<sup>10)</sup>。ただし、残念ながらこの連載をまとめた書籍が出

写真六 雑居房での就寝の方法について説明する郭氏



（撮影：小坂田裕子氏）

しんでいた。緑島へは、台東空港からプロペラ機に乗っておよそ一五分で行けるが、席数が少ないため夏は予約をとるのが難しいらしく、台東の富岡漁港から一時間程度の高速船による船旅が現実的である。波が非常に荒い外海で、その波の上を飛ぶように船が走っていくので、船酔いには十分注意しなければならない。

版されていないため、一般的な読者が通して読むための敷居は非常に高い（筆者は国会図書館で時間をかけて複写・収集した）。

#### 四、五 緑島人權文化園区（緑島郷）

最後に紹介するのは、緑島人權文化園区である。緑島とは台湾本島の南東あたりに位置する（図二）、一周二〇キロメートル程度の小さな離島である。白色恐怖の時代には以下で紹介する政治犯の収容所で有名であったほかは、小さな漁民の島であった。しかし、現在はリゾート開発がなされ、夏にはマリンスジャーを楽しむ多数の若者で賑わっている。

二〇一七年八月の訪問時はちょうどハイシーズンであり、若者グループが海水浴などを楽

図一 台湾周辺の地図



(出典：Googleマップに筆者追記)

緑島人權文化園區は、白色恐怖の時代に政治犯を収容する刑務所等として使用された施設や資料館から構成される。「緑洲山荘」では、一九七二―一九八七年に使用されていた実際の建物を保存している(写真七)。外壁には受刑者の思想を改造する目的のスローガンが残るなど(写真八、九)、当時(といっ

写真七 緑洲山荘(「八卦楼」と呼ばれる建物)



(撮影：小坂田裕子氏)



(撮影：鈴木哲造氏)

写真八 思想改造のためのスローガン



(撮影：鈴木哲造氏)

写真九 思想改造のためのスローガン

てもたったの三〇年ほど前まで使用されていた)の雰囲気を感じ取ることができる遺構である。我々が訪れたのが八月であり、当時の建物そのものであつて当然エアコンはなかったため、ほんのわずかではあるが受刑者の生活の辛さを思い知ることができた。

「新生訓導処」は、一九五一〜一九六五年に使用されていた木造の建物を再建した展示館である(写真一〇)。受刑者の等身大の人形を配置して受刑者の生活を再現する展示など(写真一一)、当時の建物内の状況を再現する展示もあれば、パネルや物品を使用した通常の展示、そして被害者の一覧についての展示もある。同じ敷地内には、当時の刑務所全体の様子を知ることができる模型などを展示した資料館もある。

近くの海辺には「人權記念公園」があり、白色テロの被害者の名前と刑の種類が刻まれたモニュメントが設置されている。記されている名前はかなりの数にのぼるが、被害に遭つた年ごとに並べられているので、それを手掛かりとして景美人権文化園区を案内して下さつた郭振純氏の名前を見つけることができた(写真一二)。そのすぐ上には郭氏の手記にたびたび登場する「吳卓異」氏の名前も記されている。

なお、郭氏も緑島の新生訓導処に収用された経験があり、それを手記に綴っている<sup>14)</sup>。台湾島北端の基隆港から船に乗せられ(船倉に積み込まれ)、政治犯以外の囚人と共に移送されたという。

緑島は台湾のリゾート地であることから、マリンスポーツや温泉を楽しむにやつて来た外国人観光客であつても、そのついでにこの施設を訪れる可能性はある。では、ガイドブックの掲載状況はどうなっているだろうか。

『地球の歩き方』<sup>15)</sup>には、最も古い一九八七 八八年版から継続して緑島の紹介ページがある。調査対象とした二冊のガイドブックのうち、緑島の情報が掲載されていたのは二冊(『地球の歩き方 aruco 台湾 二〇一九 二〇』および『わがまま歩き 台湾 第一版』)のみであつた。台湾を訪れる日本人観光客が偶然この地にたど



(撮影：鈴木哲造氏)

写真一〇 新生訓導処



(撮影：鈴木哲造氏)

写真一一 受刑者の生活を再現する展示

写真二二 人権記念公園に設置されたモニュメントの一部



(撮影：筆者)

り着くのはなかなか困難であろう。なお、緑島人権文化園区が紹介されているのは、『地球の歩き方』(二〇一八一九年版で初めてガイド項目として登場、三四七頁)と『わがまま歩き 台湾「第一版」』(二八八頁)のみである。

『地球の歩き方』における緑島の紹介ページの記述を、一九八七 八八年版から二〇一七 一八年版まで確認してみると、その説明の仕方に変化があることが分かる(傍線は筆者による)。

政治犯を収容する刑務所があることでも有名。(一九八七 八八年版～一九九三 九四年版)

政治犯を収容する刑務所があったことでも知られている。(一九九四 九五年版～二〇〇二 〇三年版)

ここには人権記念公園がある。この島の刑務所に無実の政治犯が収容された過去を忘れないために作った公園で……(二〇〇三 〇四年版～二〇〇四 〇五年版)

過去には二・二八事件後に国民党が本省人に対して行った政治的迫害、白色テロで捕らえられた政治犯や反政府運動の活動家を収容した緑島刑務所として有名であった。現在刑務所は閉鎖され、跡地は人権記念公園となっている。(二〇〇五 〇六年版～二〇一六 一七年版)

過去には政治犯や反政府運動の活動家を収容する刑務所のある流刑の島だった。現在刑務所は閉鎖され、跡地は人権記念公園となっている。(二〇一七 一八年版)

以上から分かるように、二〇〇三 〇四年版から「無実の」という表現が登場し、二〇〇五 〇六年版からは一〇年以上、白色テロの説明とともに「迫害」という語が使われた。しかし、二〇一七 一八年版以降は、「無実」や「迫害」といったニュアンスは弱められ、単に「政治犯や反政府運動の活動家を収容」となっている。上述したように、二〇一八 一九年版では緑島人權文化園區の項目が新設されたが、そこでも「戒厳令下で逮捕された政治犯」という記述であるため、「無実」や「迫害」といったニュアンスは読み取りにくい。

Lonely Planet には、二〇〇一年版から緑洲山荘が Green Island Lodge として記述されている(二〇一一年版以降は現地に整備された案内板の訳を反映してか Oasis Villa とされている)。二〇〇一年版では、内部の見学はできず閉鎖されたままと案内されているが、「若い世代に台湾がよつやく手に入れた民主政治の重要性を思い起こさせるための博物館に改装する」というつわさがある」という情報が掲載されている(二四一頁)。二〇〇四年版でも、「旅行者たちは怒から何とかして内部を一目見ようとしている」と、また閉鎖されている様子が伝えられている。また、この版では人権記念公園のモニュメントについての記述が登場し、「六〇〇人の名前が彫られているが、

元凶人たちの中には全ての凶人を忘れないために他に二万人の名前が加えられるべきだと信じている人たちもいる」と記されている（一八九頁）。

二〇〇七年版で初めて、元凶人の中に当時（陳水扁政権）の副総統であった呂秀蓮（Annette Lu）や作家の柏楊（Bo Yang）がいたという情報と共に、緑洲山荘を見学できるという情報が記載される（三三二頁、二〇一四年版以降は柏楊のみ）。二〇一一年版以降は、緑島人權文化園區の名称が掲載され（三〇六頁）、「もちろんのことではあるが、ここは陰鬱な場所であるため、先にここを訪れてから残りの旅をもっと明るい目的に向けよう」というアドバイスが記されている（三〇七頁）。二〇一七年版では、海岸にあるトーチカ（pillbox）が不従順な凶人への仕置きのために使われたことも解説されている。また、島で亡くなった凶人の墓地である「第十三中隊」も独立した項目として登場している。

以上のように、緑島の紹介のされ方は『地球の歩き方』と Lonely Planet でかなり差があることが分かる。Lonely Planet では、既に二〇〇七年版で緑洲山荘を見学できるといふ情報を記載しているが、『地球の歩き方』では「跡地は人權公園になっている」とだけしか記されていないため、その間、そういった施設の見学に興味をもつ日本人観光客のアクセス可能性を相対的に低下させていたと考えられる。緑島人權文化園區の名称が登場するのち、Lonely Planet が二〇一一年版であるのに対し、『地球の歩き方』は二〇一八—一九年版である。

## 五 おわりに

以上、本稿では、台湾の二・二八事件と白色テロについての一般的な観光ガイドブックの記述を検討しながら、

それらを知り、感じることでできる施設・遺構の状況を紹介し、そういった施設に関心をもつものの事前に詳細な調査を行うわけではない一般的な外国人観光客にとってのアクセス可能性を検討してきた。本稿の基となった報告は、本シンポジウム第三部「新時代の台湾研究」の中で行われたため、今後の台湾研究に微力ながら貢献するため最後に若干の検討と提言を行って、本稿のむすびにかえたい。

二・二八事件と白色テロは国家権力による重大な人権侵害であり、それを国際的に周知する重要性が高いことは論を俟たない。国際的に周知する方法の一つとして、外国人観光客が展示や遺構を見学しやすいようにするという手段がある。この点からみて、本報告で紹介した施設・遺構のうち、台北二二八纪念馆については、ガイドブックへの掲載状況が比較的良好であるため外国人観光客が訪れやすく、見学もしやすい環境が整っている。これに対し、類似した位置付けにある二二八国家記念館、および、台湾の歴史全般を扱う国立台湾歴史博物館は、ガイドブックに掲載されておらず、外国人観光客のアクセス可能性は低い。今後より国際的に周知していくには、展示の多言語対応とともに、PR活動に重点をおくのがよいのではないだろうか。

二・二八事件・白色テロを「感じる」ことのでき、しかも台北からの交通アクセスがよい景美人権文化圏区は、日本および英語圏の代表的なガイドブックに現状としては掲載されていない。緑島人権文化圏区については、交通アクセスの面から一般的な外国人観光客が訪れやすいとは言えない。しかしながら、英語圏の代表的なガイドブックには継続的に紹介されており、バカンス期間中に長期滞在をする欧米人の旅行スタイルであれば台湾滞在中に訪れる可能性は十分にある。対して、日本のガイドブックには詳しく掲載されてまだ日が浅い上に、短期間の滞在で主要な観光地を効率よく巡るといった一般的な日本人の旅行スタイルでは、最初から主要目的地として目指さない限り、緑島までたどり着くことは至難の業である（だからこそ、バックパッカー向けと言われる『地球の歩き方』

他二冊のみにしか、緑島が紹介されていないのかもしれない。これを踏まえれば、観光客へのPRにおいて、景美を短期滞在者向け、緑島を長期滞在者向けに重点をおくという方法が考えられるのではないか。景美であれば、短期間しか滞在しない日本人観光客でも訪れる可能性は十分にある。

今後台湾を訪れる可能性のある日本人の中には、近現代史や人権に関心のある人々も少なくはないだろう。ドイツに旅行に行ったときに「ベルリン・ユダヤ博物館」に立ち寄り、アメリカのワシントンDCでは「ホロコースト博物館」を訪れるような人々である。ただし、ナチスによるホロコーストについての基本知識は日本でも学校教育等で得られるが、二・二八事件・白色テロについてはそうではない。そういった人々が何らかのきっかけで台湾に旅行に行く機会を得たとして、二・二八事件や白色テロに関心を向けることができるかという観点から見れば、台湾観光に関する日本語のガイドブックの現状は残念な状況であると言えぬ。日本語のガイドブックは『地球の歩き方』も含めてほとんどが写真を中心として構成されており、Lonely Planetに比べると文字の情報量が少なく（文字情報を中心に構成されているのがLonely Planetの特徴と言えるかもしれないが）、名所・旧跡の背景情報が十分ではないように思われる。本稿執筆のための調査で多くのガイドブックを手にとったが、雑貨やショッピングに関する情報など、友人同士での海外旅行に積極的な女性を主たる読者層と設定したと思われる情報が多めに掲載されていると感じられた。もちろん、商業出版であるからこれは当然かもしれない。しかし、雑貨やショッピングにさほど関心がなく、名所・旧跡の背景知識を欲する（筆者のような）人々も台湾に旅行に行くので、そうした読者層を想定し、二・二八事件や白色テロを含む台湾の近現代史に関する場所を巡るために便利なガイドブックを制作することができないだろうか。日本統治期の歴史に関心をもって観光をする日本人観光客は一定数いるようなので、そこからその後の歴史にも関心をもてるような「仕掛け」ができれば成功するかもしれない。

白色テロは近現代における国家権力による重大な人権侵害という意味で、日本における治安維持法とそれに基づく特別高等警察による言論弾圧と共通点がある。しかし、日本において治安維持法関係の常設的な展示はない。それ自体問われるべき課題ではあるが、こつした問題に関心のある日本人は、二・二八事件と白色テロに関する施設を訪れて展示を見学し、そこから想像力を働かせることによって、ある種の「類推」ができるかもしれない。台湾の二・二八事件・白色テロの関連施設は、日本の負の歴史を知るために欠けているピースを補うきっかけを与えてくれるものになりうるという点でも意義をもつ。

【付記】本稿は、中京大学社会科学研究所学術講演会・日台学術シンポジウム「台湾史研究の軌跡と展望」（二〇一八年一月六日於中京大学）での報告に基づきながら、その後の調査結果を踏まえて大幅に加筆・修正を加えたものです。必要な写真資料を提供してくださった檜山幸夫、小坂田裕子、鈴木哲造各先生に感謝申し上げます。

## 註

- (1) 一般社団法人中央調査社「台湾に対する意識調査報告書（二〇一七年二月）」。
- (2) 全てが国立国会図書館に納本されているとすれば、最も古い版は一九八七 八八年版であり、それ以降毎年出版されている。ただし、内容を見る限り、実質的な改訂は二年に一度のようである。
- (3) 二〇一八年一月四日にジュンク堂書店名古屋店にて調査。その後、国立国会図書館で補充的に調査を行った。
- (4) Amazon.co.jpにて入手可能なものを収集。結果として、二〇〇一、二〇〇四、二〇〇七、二〇一〇、二〇一四、二〇一七年版、および、一九八五年出版の韓国・台湾版が入手できた。半ば当然のことではあるが、一九八五年版には二・二八事件関係の記述は見当たらなかった。
- (5) 二〇〇三 〇四年版の「台湾の歴史」（三三二～三三三頁）の記述を引用する。「台湾小史」から細かな点は改訂されて

いるが、論旨は同一である。

- (6) 被害者となった知的エリートには法曹も多く、当時から法曹界に卒業生を輩出していた中央大学の卒業生が一〇名以上いるという。中央大学の松野良一教授は、この点に着目し、中央大学でジャーナリズムを専攻する現役学生が中央大学の卒業生の被害者の家族に対してインタビュースする調査プロジェクトを行っている。松野良一（二〇一六）、「台湾二二八事件と中央大学卒業生」プロジェクトと受難者家族の証言概要」、『総合政策研究』二四号、四七～七〇頁。
- (7) 郭振純（二〇一〇）、「煉獄の彼方 私の歩いた道（第八回）」、『月刊MOKU』二〇一〇年二月号、九五～九九頁。
- (8) 「台湾二二八事件」(<https://taiwantoshikoishi.localinfo.jp/posts/958504>)、二〇一八年一〇月三日最終アクセス、津田邦宏（二〇一五）『私の台湾見聞記——歩き考えた「国のかたち」』高文研、一三五～一三七頁。
- (9) 郭氏が床に拵げているのは、看守の目を盗んで新聞紙とシャツの生地等から作られた、就寝用の敷員兼文機の脚となるものである。郭振純（二〇一〇）、「煉獄の彼方 私の歩いた道（第二〇回）」、『月刊MOKU』二〇一二年二月号、一〇五～一〇九頁。
- (10) 「特別インタビュース タイワン建国運動家 郭振純」、『月刊MOKU』二〇〇九年六月号、郭振純（二〇〇九）（二〇一一）「煉獄の彼方 私の歩いた道（全四一回）」、『月刊MOKU』二〇〇九年七月号～二〇一二年一月号。
- (11) 現在も使用されている法務部矯正署管轄の刑務所「緑島監獄」もある。
- (12) 残されていたラジオ放送の案内表示（FM大阪や朝日放送などの関西の放送局）に気づいたことをきっかけとして、この航路には昔大阪湾で走っていた船舶が使用されていることを確認した。おそらく航路が廃止されて払い下げられたのであろう。大阪湾の航路の廃止については、京俊介（二〇一七）「フェリー航路の減少」『八事』三三三号、四八～五五頁。
- (13) 写真八は「精誠團結 擁護政府 自力更生 奮発圖強」、写真九は「臺獨即臺毒 共産即共慘」と書かれている。
- (14) 郭振純（二〇一〇）、「煉獄の彼方 私の歩いた道（第三三回）最終回」、『月刊MOKU』二〇一二年三月号～二〇一二年一月号。

調査対象とした観光ガイドブック

『地球の歩き方 台湾』(ダイヤモンド・ビッグ社、各年)

Lonely Planet Taiwan (Lonely Planet Publications, 2001, 2004, 2007, 2011, 2014, and 2017)

【台湾版】

『& TRAVEL 台湾 二〇一九』(朝日新聞出版、二〇一八年)

『台湾 完全版二〇一九』(JTBパブリッシング、二〇一八年)

『タビトモ 台湾——高雄・台南・花蓮・台北』(JTBパブリッシング、二〇一八年)

『トラベルデイズ 台湾』(昭文社、二〇一二年)

『地球の歩き方 aruco 台湾 二〇一九 二〇』(ダイヤモンド・ビッグ社、二〇一八年)

『地球の歩き方 MOK ハンディ 台湾の歩き方二〇一九 二〇』(ダイヤモンド・ビッグ社、二〇一八年)

『まっふる 台湾一九』(昭文社、二〇一八年)

『フラチッタ 台湾』(JTBパブリッシング、二〇一八年)

『るるぶ 台湾一九』(JTBパブリッシング、二〇一七年)

『わがまま歩き 台湾「第一版」』(実業之日本社、二〇一七年)

【台北版】

『ことりっぶ 海外版 台北』(昭文社、二〇一四年)

『ことりっぶ 海外版 もっと台北』(昭文社、二〇一五年)

『ソロタビ 台北』(JTBパブリッシング、二〇一八年)

『タビトモ 台北』(JTBパブリッシング、二〇一七年)

『地球の歩き方 Planet 台北』(ダイヤモンド・ビッグ社、二〇一五年)

- <sup>100</sup>地球の歩き方 aruco 台北 二〇一八 一九<sup>101</sup>(ダイヤモンド・ビッグ社、二〇一七年)  
<sup>101</sup>ハレ旅 台北「改訂版」(朝日新聞出版、二〇一七年)  
<sup>102</sup>まつぶる 台北一九<sup>102</sup>(昭文社、二〇一八年)  
<sup>103</sup>Mapple PLUS 台北<sup>103</sup>(昭文社、二〇一八年)  
<sup>104</sup>ララチッタ 台北<sup>104</sup>(JTBパブリッシング、二〇一八年)  
<sup>105</sup>るるぶ 台北一九<sup>105</sup>(JTBパブリッシング、二〇一八年)  
<sup>106</sup>わがまま歩き 台北「第四版」(実業之日本社、二〇一六年)